

# 漆芸家南部吉英と井波漆

Japanese Lacquer Urushi Artist NANBU Kichiei and the Inami Lacquer Urushi

● 長谷川総一郎、齊藤晴之／富山大学芸術文化学部

HASEGAWA Soichiro, SAITO Haruyuki / The Faculty of Art and Design, University of Toyama

● Key Words: Urushi Artist-NANBU Kichiei, Japanese lacquer Urushi, Inami, Local History

## 要旨

この論文では、井波の漆芸家南部吉英の生涯の概略と井波漆における南部の果たした役割を主に文字情報で明らかにすることを目的とする。南部は既に 2002 年に死去している。もともと井波彫刻と井波漆は彫って塗るという彫刻業と塗師屋は一体のものであった。それが建築に白木仕上げのテイストが次第に入り始めたことと日常什器がプラスチック製に代わり始めてから塗師屋の仕事は徐々に減少し始めた。井波漆ではここ 10 数年ほどの間に漆塗師の死去が続いた。6 人は越えていようか。彼らに後継者はほとんど居ない。南部は存命中「漆は芸術の世界でしか生きていけない」とよくいっていた。本論が、現代漆芸を体現しようとした南部の生き方から漆芸の未来を探る資料となれば幸いである。南部が発表した日展や現代工芸展の作品は順を追って見ていかないと、より正確な資料とはならないであろうが、これは他日に期したい。

## 1. 南部家の先祖

南部家初代弥平の父・栄助からあげる。栄助は旧隠尾村（現在砺波市庄川町）仁右衛門の次男。分家を成し、職人名を栄輔（初代）と名のったという。文化 8 年（1811）拝領地大工茶屋柴田清右衛門に入門して宮大工となり、弘化 4 年（1847）瑞泉寺太子堂再建では棟梁松井角平のもとで副棟梁をつとめた<sup>\*1</sup>。明治 3 年（1870）77 歳で死去。松井家は井波宮大工の宗家、現在の松井建設<sup>\*2</sup><sub>※3</sub>である。

栄助には長男・理作（栄輔 2 代、1815 頃 -1886）と次男・弥平が居た。長男の栄輔 2 代は宮彫りも能くした宮大工で若いときから才覚を発揮。天保 14 年（1843）瑞泉寺太子堂再建の新始式に 12 代番匠屋与八郎守貞、金剛寺屋利八（初代岩倉理八）と列席した。32 歳で唐挟間葺鴛鴦、向拝墓股、龍正中を彫ったとされるが、これらは明治 12 年（1879）焼失。後、逸品とされる井波八幡宮四神旗の玄武、白虎、青竜、朱雀を彫り、宮大工としては、嘉永 3（1850）年井波八幡宮本殿の棟梁、明治 18 年（1885）瑞泉寺本堂再建の副棟梁などをつとめた<sup>\*4</sup>。理作は明治 19 年（1886）71 歳で死去。彼は栄之輔（栄助とも）という子をもったが、39 歳で死亡したため家系は

絶え、理作の弟・弥平の家がその法灯を継いだ。

初代は弥平（1815 頃 -1881）となる。父・栄助を師とした宮大工。瑞泉寺本堂再建にあたり、手斧部の棟梁をつとめたが長男・栄輔 2 代ほど目立った業績はなかったのか、記録は少ない。66 歳で死去した。

2 代目は吉蔵（吉蔵初代、1852 頃 -1919）<sup>\*5</sup>で弥平の長男。代々大工の家系から漆塗師に転向。城端白蒔絵漆の 11 代小原治五右衛門得賀に入門。得賀の長男が少年時代に死亡したため、吉蔵は 12 代治五右衛門白晁を教え<sup>\*6</sup>、67 歳で死去した。

2 代吉蔵に弟・理左（1858-1927）が居た。弥平の次男。初代利八に子が無く、金剛寺屋に婿入りし、2 代岩倉理八（順故）を襲名。田村与八郎守貞の娘・さか、を娶り、寺社彫刻の名門として岩倉一門を形成。番匠屋と双壁を成した。京都に長期滞在し、度重なった焼失後の最後の再建となった東本願寺明治造営に従事し、山門や本堂の彫刻を現地製作。後年は帰郷して田村理七を名のり、瑞泉寺再建太子堂の彫刻を彫った。

3 代目は義一郎（吉蔵 2 代、1882-1947）で、吉蔵初代の子。吉蔵を襲名。塗師屋として会席ご膳やお椀塗り、仏壇の箔洗いや外泊を伴う寺仕事などの漆塗りを生業とし、螺鈿・青貝もこなした。松井角平や縁戚でもあった田村与八郎の塗箔を多く手がけ、井波漆工組合の仕事もよくした。大正 7 年（1918）、農商務省主催の第 5 回図案及び応用作品展覧会に入選<sup>\*7</sup>。図案は弟雄三が担当。同展は農展や工藝展などの名で呼ばれ、その入選は職人が全国で認知を受ける登竜門であった。井波漆業界では最初の入選者。その後、昭和 16 年（1941）井波職人が新文展一挙 5 人入選という快挙の年まで、井波の漆塗師職人の出品が陸続とあった<sup>\*8</sup>。吉蔵の工藝展入選は、その後に開花する井波美術の曙の嚆矢であったと言える。66 歳で死去した。

4 代吉英は、義一郎の長男、弥平から数えて南部家の 4 代目。漆塗師（塗師屋）<sup>ぬっしや</sup>では 3 代目、職人家系では 6 代目となる<sup>\*9</sup>。

## 2. 漆芸家南部吉英の作家人生

南部吉英は共著者・長谷川の叔父。長谷川の母・百

合子（故人）の弟でもある。長谷川は物心付いた頃から南部の死去まで半世紀余り関わってきたことになる。しかし、美術という共感空間をあいまみえることができた期間には、大学で美術を専攻して以来 35 年余り。一方、共著者の 1 人・齊藤は現代工芸美術展と日展出品において、南部とは井波の同業の先輩。両展出品のための図案研究会において南部の作品や図案を後輩作家として見入ってきた間柄である。

南部の作家人生について、影響を与えた事柄や特徴を以下にまとめてみる。

1 番目には、この世代の人々が共通している戦争という体験。2 人の共著者は戦争の痛みは全く分からない。あくまで歴史上の出来事でしかない。でも、歴史に if は無い、といっても戦争と言うものが無かったら南部はどんな人生を送ったであろうか。それほど戦争が生涯の大きな転機や重しとなっている。

南部は戦争と言うものが無かったら高等小学校卒業後家業の漆職人を生業としながら、日展作家として大成していたのではなかろうか。また、敗戦が無かったら陸軍士官学校を卒業し陸軍大学校を経て職業軍人として地位の高い階級まで上り詰めたのではないと思われる。

2 番目には南部は東京に学び、旧制の高等教育機関の前半を経ていること。井波の職人の多くは尋常小学校を経て直ぐ年季奉公するのが一般的。終戦前後、井波美術の発展に貢献のあった第一世代の職人・作家に東京で学んだ人は殆ど居ない。今日に比べて交通事情は悪く、日本はまだ貧乏時代。でも戦後の井波美術の二世は一斉に学歴競争に走り出している。

年譜にも記載するが、南部が陸軍士官学校で席を同じくした仲間には、戦後日本のリーダーと成った人が多い。官僚や医療関係者が多く、なかには大手の会社社長や与党の政治家などが居た。南部は晩年になって個展をとおして彼らの恩恵に与るという役得もあった。彼らが学んだ戦時体制時代は軍事優先であって美術は軽んじられた。そんな体制のなかで学校教育はその思想普及の中核を占めた。

ところが、戦後は価値観が一転。経済成長は美術の世界を支え、その地位をも向上させた。南部は昭和 25 年 30 歳で日展初入選をした後、27 回も入選を果たしている。一途に漆芸家の道をひた走った。ところが昭和 57 年、既に 62 歳。やっと現代工芸展会員賞を射止めたが、次は日展特選獲得がキャリア形成の順番となる。しかし、日展工芸部門は出品者が多く、そんな簡単に特選受賞は実現できない。さらに、日展の世界で情報発信力のある特選受賞のためには、上部階層への恭順の姿勢を示さなくてはならない。戦時体制のなかで南部に培われた支配的な軍人優先の観念は、戦後になってから逆転したように大成した美術作家の上層部への随順は屈従と映ったようだ。

これを機会に南部は日展出品を断念し、事実上無所属となる。伝統漆芸の世界に「生涯現役」<sup>\*10</sup>として専念する。以降、死去まで町や県内外の作家仲間の組織にほとんど顔を出していない。心情的には陸軍士官学校やそこで学んだ仲間、そして先祖の栄えある職人へのノスタルジーが頭を擡げてくる。70 歳になったとき、先述した仲間など大物を相手とした東京などでの 3 回の個展や各地で開催された陸軍士官学校同窓会への出席がその証左とみることができる。

3 番目には教え子を多く持とうとはしなかった。政治の世界でも数は力。現代の民主主義において多数決に勝る方法は発見されていない。でも南部は教え子の数を重視しなかったのか、筆者には分からない。生涯に弟・正策と横山清だけである。南部は、弟子の数を自慢する作家に高い評価を与えていなかった。親鸞の「歎異抄」六章に「御同朋御同行」<sup>\*11</sup>が書かれている。私の弟子と思うような弟子は一人も持っていない、という意味。親鸞の教えにも通じる世俗を離れた孤高の作家であった、と言えようか。

4 番目には、日展を途中で退会していること。戦後の井波は「日展の町」として高い評価を受けた。井波美術や井波彫刻発展の要因に戦後の日展出品者が果たした役割は余りにも大きい。日展の活動は井波の木彫刻産業においてブランドを高めるのに大きな貢献があったことは否めない。その日展を辞めたのである。南部が日展出品を一切辞めてからは、南部の優れた技や造形力に裏打ちされた日展での長年の実績に対して惜しむ声が強かった。一方では、潔い、南部さんらしい、という人も居た。

南部の生き方や人生の選択に共著者は口を挟む余地はない。自分の人生は自分で責任を取らねばならない。覇権主義を嫌い、権力志向が生に合わなかったことだけは間違いないようだ。時代の環境や人間関係による出会いなどの外的要因は運としか言いようがない。南部はこれを口癖のように「あたり」と表現していたのが印象深い。真宗門徒の「絶対他力の大道」の心の趣きなのであるろうか<sup>\*12</sup>。

### 3 南部吉英の生涯の漆芸作品

#### (1) 自然観照時代—漆芸家をめざして

昭和 25 年 30 歳で初入選。30 代前半でひと括りができる。瑞菜、糸瓜、菖蒲など当時の身近なモチーフを自然観照という態度に基づきながら、それらを構成した作品を出発点としている。展覧会出品というのは、漆の技法は当然こなしていることを大前提に、あとは造形力、特に構成力に新しい感覚が要求されてくる。大胆に空間を切ったり、空間を取ったりする方法を採っているところが新鮮であったろう。でもこの方法は横山白汀らの指導を受けている。手元では白黒写真で判断しているので、色彩は分



からない。衝立や風炉先屏風のような小屏風は出品の世界における時代の流行でもあった。



漆衝立「白日」1954年

#### (2) 卵殻技法の時代—漆芸家としての橋頭堡の構築

昭和30年代前半。年齢は30歳代後半から40歳前後にかけて割り潰した卵殻を漆で固めるという技法で新しい心境地を世に問うている。一般には漆で白色を出すことは難しい。しかし、真っ白な卵の殻と呂色仕上げの黒漆との対比が美しい。マチュールの対比も近代的感覚に相応しい。この時代は、段々畠や山々が主要モチーフとなる。自然観照という素朴な態度から脱して、自然の柔軟な形態を直線化。古くからの図案指導の王道であった便化テクニックを発展。



漆二曲屏風「夕映」1958年

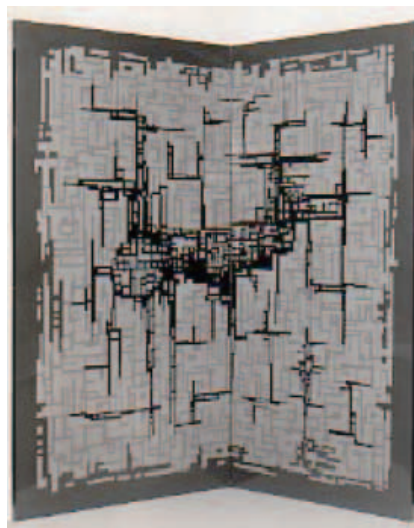
さらに、次の時代の主要モチーフとなる都会を扱った「街」で県展選抜展文部大臣賞を受賞。これは便化を押し進め、卵殻技法を部分的に取り入れながらリズムカルな

幾何的構成に昇華した秀作。この受賞は地元の各新聞で、大きく取り上げられ<sup>※13</sup>、漆芸家としての堅固な橋頭堡を築くこととなった。これまでの衝立や屏風という伝統的な形式を徐々に離れ、次第に漆アートを表現しやすい2曲のスクリーンという一種のタブローのような形式に変化していく時代である。

#### (3) 街表象の時代—スタイルの確立

30代後半からの外部評価が弾みとなって自信が付いてくる。1960年代から70年代半ば頃までの年齢は40歳代から50歳代。この時代が仕事に一心不乱に熱中できた時代。技術も造形も磨かれ進化を遂げる。この時代のライトモチーフは都会や街。上京することが多くなったことを契機としたのか、都市の夕風や夜半の印象がヒントとなる。仄かな光と闇の織り成す都市風景。これらの視覚印象が南部の造形表象にリファインされて作品に視覚化されていく。大胆な構成の中には神経質なまでに緻密に細分化された画面分割。時には青貝を貼りつけて煌びやかな雰囲気醸し出す。視る人を唸らせるくらいの稠密な仕事。題名は街や都市を越えて「聚」や「映」にメタモルフォーズ。

全国紙でも取り上げられ<sup>※14</sup>、日展特選候補者として度々推奨された<sup>※15</sup>。南部のスタイルは確立され、漆の「抽象的」<sup>※16※17</sup>表現の作家として発想、技ともに作家仲間やマスコミでの評価を獲得していった時代である。



漆二曲屏風「COMPOSITION - 街」1970年

#### (4) 非対称造形の時代—新たな挑戦

70年代後半から80年初頭頃まで。年齢は50歳代後半から60歳代頭頃まで。これまでと全くシンメトリー構図の作品が多かった。これは南部の生真面目な性格から来るものなのか。この時代の技法や街表象は前の時代と変わらないが、構図がア・シンメトリー、つまり非対称に変化。

それは日展の先生からの指摘やサジェスションがあったのか。それまで南部の仕事に見慣れてきた者にとっては心境の変化と映ったであろう。本人にとっては革命的な出来事。作家にとってスタイルを変えることは過酷な自己叱咤。これは団体展出品継続という、公的発表を継続している作家の宿命かもしれない。この時代の前半の仕事が一番素晴らしい。昭和 53 年（1978）の「Vital-78」や 55 年（1980）の「彩漆映象」などは、新しい美意識を鑑賞者に提供し、エネルギーに満ち溢れている。漆という素材を現代の絵画表現の可能性にまで高めようと挑戦を続けてきた成果が現れた時代。井波漆工会会長や井波美術協会会長を務めた 50 歳代。しかし数年後、日展での 27 回もの入選実績をあとにして日展から去ることを決意する。

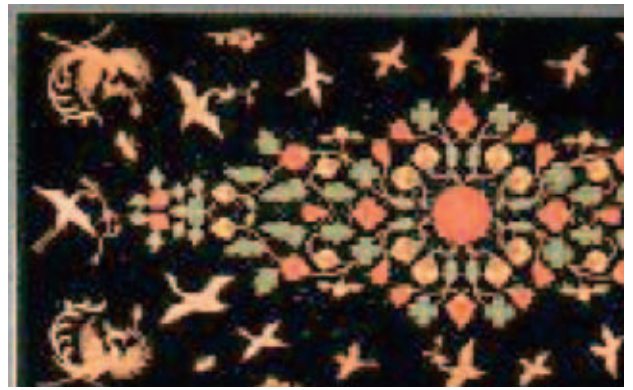


二曲屏漆風「彩漆映象」1980 年

#### (5) 伝統回帰の時代—フリーランスの漆芸家

84 年から 2000 年頃まで。年齢は 64 歳から死去の 82 歳の数年前まで。昭和 58 年（1983）63 歳で日展を退会し、あらゆる出品活動から退いた。これ以降、これまで展覧会に出品していたような現代的な実験作品は一度も制作していない。それらに替えて鯉、鶴、竹、都市風景、文様などをモチーフとしながら、これらを一般的な人が分かりやすい写生的に描くのである。形式は座敷テーブル、額パネル、飾り棚、衝立など実用的な作品を制作。おそらく販売や注文作品。

満足の行った作品の完成時には、そのご披露に共著者（長谷川）も含め親類縁者に声がかかった。日展出品作で磨き抜いた緻密な技と現代的な感覚に裏打ちされた作品には、見るものを釘付けにした。計算し尽くされた構図、時間構わずの入念な仕事を見せる南部の姿には、先祖から流れる職人の血脈へのプライド、漆芸プロフェッションとしての矜持、それでいて俗世間から解き放たれた漆職人の自由な魂を見てとれた。



天板真中の文様（漆の座敷テーブルの部分）

#### 4. 井波漆における南部吉英の果たした役割

南部の制作姿勢や彼が示した作品のテイストはその時々時代において、ある意味で井波美術や井波漆の次の流れの方向性を明確に示す羅針盤の役割を担っていたのかもしれない。彼の先を走った井波における横山白汀や高岡の村田吉生に続き、中央から頻繁に指導に訪れた富山市出身の山崎覚太郎と師弟関係の高橋節郎、佐治賢司らの日本の工芸美術界の牽引的役割を果たした指導者達の思いを的確に理解し、彼らが目指す形を具現化する役割を果たしている。

中央の展覧会出品に向けて高岡や井波で開かれた図案研究会において、村田吉生や南部吉英が提示した漆パネルや屏風の図案は、絵画的表現にデザインの要素を取り入れ、螺鈿や卵殻等の伝統的工芸素材や当時新しく開発された豊富な色数の色漆の表現を取り込んだものであった。これらの下図は、仕上がりの迫力がそのまま伝わる表現力に富み、図案研究会をとおして作家を目指す職人達に多くの刺激を与えたと思われる。

それは、そのままアカデミックな美術学校で教授されて来た工芸デザインの図案作成法の王道に沿って優等生としての優れた理解力と繊細な感性に裏打ちされた描写力を兼ね備えていた。それが、何回かの図案研究会を経て、中央からの指導者の具体的な指導に添って、本作へと結実していく様は確実な漆工芸技術の力量と相俟って日本の工芸界をリードするに足る成果として、井波や高岡の展覧会出品を目指す作家の卵達や一時代前の先輩職人達にも大きな刺激となったと考えられる。

ただ、彼の美に対する潔癖な制作姿勢がその優秀さゆえに孤高の峰を目指すものになりかねない危うさを秘めていたとも考えられる。その純粋さゆえに一つの集団の中で確実な存在感や地位を築いてゆくことにある意味齟齬があったのかもしれない。その意味で、多くの場合において、対外的な生涯の業としての美の確立が単に純粋な真実への探究心のみでは達成されず、人としての純なる妥協を受け入れることや協調性が求められることは作家を目指す



ものにとって果たして幸といえるのであろうか。南部は最後まで自己の目指すところを他に阿ることなく確実に実現しようと生涯において研鑽した姿を井波美術の流れの中で示し続けたといえよう。その探求の姿勢は、多くの次代の作家達の心に一つの指針として刻まれていると確信する。彼の作品から受ける明快さや清清しさは現代においても他の追随を許さない独自の世界として今も見るものを感動させる力を秘めていることは確かである。一般的な用途を持った工芸が芸術の中にその存在意義を確立させ工芸美術の領域に躍り出た時代の流れの中で、今一度、南部の生き様を検証することは、富山におけるこれからの美術工芸の方向性を探る上で有意義なことであると確信する。

## 5. 南部吉英の年譜

大正 9 年（1920）2 月 20 日

旧井波町（現在南砺市）井波 3627（三日町）に漆塗師の父・吉蔵（本名義一郎）、母・なを、の長男として生まれる。

大正 15 年（1926）6 歳

4 月 旧井波尋常小学校入学。

同校での成績はいつも 2~3 番にあり、図画と手工はいつも 10 点を取り、絵を能く手が器用な少年であった。5 年生の時中田元一（後の書家中田大雪）に習字を習う。

昭和 7 年（1932）12 歳

3 月 旧井波尋常小学校卒業。

4 月 旧井波高等小学校入学。

昭和 8 年（1933）13 歳

旧井波高等小学校校長室に瑞泉寺山門を描いた図画が展示される。2~3 年生。

昭和 9 年（1934）14 歳

6 月 同校 3 年生の時、町長綿貫栄が構想した井波商工学校の教員として東京から招聘された図案家小山田政義（後の彫刻家板橋一歩）が赴任し、手工の授業を受ける。

昭和 10 年（1935）15 歳

3 月 旧井波高等小学校 3 年卒業。父のもとで家業の塗師屋を手伝う。

10 月 家業を継ぐことを嫌ったが、父の勧めと当時の町長綿貫栄の仲介により京都の宮内庁御用達漆塗師 3 代平尾伝右衛門伝三に弟子入りする（年季明けせず、2 年半居た）<sup>※18</sup>。

昭和 12 年（1937）17 歳

この頃、平尾師匠の下で石清水八幡宮や知恩院の漆物修理を手がける。

日本の軍国化急傾斜のもと、漆塗師に飽き足りず職業軍人に憧れ、師匠や親に内緒で陸軍工科学学校受験を決意

し、陸海軍受験予備校の夏季講習などを受講する<sup>※19</sup>。

昭和 13 年（1938）18 歳

6 月 陸軍工科学学校第 19 期銃工科（2 年制、現在の後楽園の場所）に入学。兵器の開発や整備などを学ぶ。

昭和 14 年（1939）19 歳

11 月 同校を繰り上げ卒業し、陸軍技術本部（北新宿）に配属され、兵器開発に 3 年半、従事する。航空母艦の浮沈実験のため山口県に度々出張した。

昭和 19 年（1939）24 歳

3 月 陸軍予科士官学校（大泉学園町）入学。

昭和 20 年（1945）25 歳

3 月 同上校の短期養成で本科（座間）進学。

第 58 同期生に加藤六月（後の衆議院議員）、本山英世（後のキリンビール社長）岡本進（後の旧カネボウ社長）ら、戦後に政財界のリーダーとなった士官候補生が多かった。

8 月 陸軍士官学校卒業まで半年を残し、最後の士官候補第 60 期生として終戦を迎える。

昭和 20 年（1945）25 歳

10 月 病身の父、漆塗師・吉蔵のいる井波の自宅に復員し、一時、飛島組（現在の飛島建設）に勤務する。

昭和 22 年（1947）27 歳

2 月 癌で患っていた父・吉蔵（義一郎）が死去、享年 66 歳。

家業の塗師屋を継ぐことを決心する。生業の寺院塗箔などの仕事が無く、庄川町の轆轤生地を購入し、摺り漆を手掛けて生計をたてる。

4 月 旧井波町沖の才川ふみと結婚（現在、84 歳、井波在住）。

昭和 24 年（1949）26 歳

この頃より日展入選を目指して研鑽をつむ。井波町では昭和 16 年文展工芸部 5 人入選を契機として、職人の美術作家登竜への気運が高まり、日展を舞台に毎年入選者や、その後特選受賞者があらわれた。

昭和 25 年（1950）30 歳

4 月 長女・久美子生誕生（その後、旧大門町、現在射水市の笹島家に嫁ぐ）。

11 月 第 6 回日本美術展覧会（以下、日展）「瑞菜文漆小屏風」初入選（東京都美術館）。以後 26 回入選。漆芸図案の指導を、旧井波では横山白汀、東京では日展審査員山崎覚太郎、その後は日展会員高橋節郎に受ける。

昭和 26 年（1951）31 歳

7 月 第 6 回富山県展「夕映」入選（高岡市商工奨励館）。

11 月 第 7 回日展「和室用ラヂオ棚」（漆芸棚）入選（東京都美術館）。

この頃より主に日展入選者で構成される井波工芸美術

協会（井波美術協会の前身）が県外での美術展を毎年開催し、南部は横山玉抱、新敷晃仙、大島一畝らと積極的に県外展の事業展開に動く。

この頃、南部の7歳下の弟・南部正策を弟子として入れる。

昭和27年（1952）32歳

11月 第8回日展「初夏漆衝立」入選（東京都美術館）。

昭和28年（1953）33歳

11月 第9回日展「花菖蒲」（漆芸屏風）入選（東京都美術館）。

昭和29年（1954）34歳

11月 第10回日展「白日」（漆衝立）入選（東京都美術館）。

昭和31年（1956）36歳

7月 長男・吉秀誕生（現在、キャノン KK 勤務、東京在住）。

昭和32年（1957）37歳

11月 第13回日展「山之たんば 二曲屏風」入選（東京都美術館）。

昭和33年（1958）38歳

6月 第13回富山県展「段々畑」金賞（富山市商工奨励館）。

11月 第1回社団法人日展「漆二曲屏風（夕映え）」入選（東京都美術館）。

昭和34年（1959）39歳

6月 第14回富山県展「夕映」銀賞（高岡市立美術館）。

11月 第2回日展「山」（二曲屏風）入選（東京都美術館）。

12月 第10回国体協賛事業第3回スポーツ芸術展「群鶏」（二曲スクリーン）銀賞（銀座松屋）。

昭和35年（1960）40歳

11月 第3回日展「群鶏（漆屏風）」入選（東京都美術館）。

昭和36年（1959）41歳

4月 母・なを死去、享年69歳。

7月 第16回富山県展「街」高岡市長賞（高岡市立美術館）。

11月 第4回日展「夜情（漆二曲スクリーン）」入選（東京都美術館）。

昭和37年（1962）42歳

2月 第1回全国県展選抜展「漆パネル「街」」文部大臣賞受賞（高島屋）。

5月 第1回日本現代工芸美術展「春宵（漆棚）」入選（高島屋、日本橋、なんば）。

旧井波町商工観光部より観光絵葉書の原画を依頼され、その後モチーフとなる散居村風景を描く。他には大島一畝、宮崎辰児らに依頼があった。

11月 第5回日展「青い都市」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和38年（1963）43歳

2月 第1回全国県展選抜展「漆パネル「街」」文部大臣賞受賞（高島屋）。

5月 第2回日本現代工芸美術展「作品」入選（高島屋、日本橋、なんば）。

10月 第14回富山県勤労者美術展審査員（以後31年も）。

11月 第6回日展「樹影」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和39年（1964）44歳

11月 第7回日展「央」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

特選の候補にあがる。

昭和40年（1965）45歳

4月 第4回日本現代工芸美術展入選（東京都美術館）。後、アメリカ、ニュージーランドでの巡回展に出品。

6月 第20回富山県展「樹精」金賞（富山県民会館）。

11月 第8回日展「寂明」（漆二曲スクリーン）」入選（東京都美術館）。

昭和41年（1966）46歳

11月 第9回日展「聚」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和42年（1967）47歳

4月 第6回日本現代工芸美術展「聚」（漆パネル）入選（高島屋、日本橋、なんば）。

6月 第22回富山県展審査員（以後26回展、35回展も務める）

11月 第10回日展「聚」（漆二曲スクリーン）」入選（東京都美術館）。

昭和44年（1969）49歳

9月 長年住み慣れた三日町（西町）の家を離れ、山見995-5（堀道）に新築、移転する（この家は、その後、谷-今町線の道路となり、平成17年（2005）年取り壊される）。

11月 改組第1日展「漆飾棚」入選（東京都美術館）。報道より内々に特選決定が知らされたが、翌朝覆る。

昭和45年（1970）50歳

11月 第2回日展「COMPOSITION 一街」（漆二曲スクリーン）」入選（東京都美術館）。

昭和46年（1971）51歳

4月 第10回日本現代工芸美術展「邑」（漆パネル）入選（高島屋、日本橋、なんば）。後、ロスアンゼルス、ヒューストン、シドニー、キャンベラなどの巡回展に出品。

11月 第3回日展「映」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和 47 年（1972） 52 歳

1 月 旧井波漆工會會長（53 年まで）。

4 月 第 11 回日本現代工芸美術展「礁奏」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

横山清が徒弟として入門する（7 年間在籍）。

11 月 第 4 回日展「蒼映」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和 48 年（1973） 53 歳

3 月 富山県美術連合会評議員。

11 月 第 5 日展「夜景」入選（東京都美術館）。

昭和 49 年（1974） 54 歳

11 月 第 6 回日展「夢中夢」（漆二曲スクリーン）」入選（東京都美術館）。

昭和 50 年（1975） 55 歳

11 月 第 7 回日展「飾棚」（漆芸棚）入選（東京都美術館）。

昭和 51 年（1976） 56 歳

4 月 第 15 回日本現代工芸美術展「彩漆飾棚」入選（高島屋、日本橋、なんば）。

昭和 52 年（1977） 57 歳

1 月 井波美術協会会長（昭和 54 年 1 月まで）。

昭和 53 年（1978） 58 歳

11 月 第 10 回日展「Vital-78」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和 54 年（1979） 59 歳

4 月 第 18 回日本現代工芸美術展「ナイトスケープ III」入選（高島屋、日本橋、なんば）。日本現代工芸美術家協会会員となる。

11 月 第 11 回日展「Night — Scape79」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和 55 年（1980） 60 歳

4 月 第 19 回日本現代工芸美術展「幻影」会員出品（高島屋、日本橋、なんば）。

11 月 第 12 回日展「彩漆映象」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和 56 年（1981） 61 歳

4 月 第 20 回日本現代工芸美術展「朱の幻想」（漆二曲スクリーン）審査員出品（高島屋、日本橋、なんば）。

9 月 第 6 回富山県青少年美術展審査員。

昭和 57 年（1982） 62 歳

4 月 第 21 回日本現代工芸美術展「朱景幻想」（漆二曲スクリーン）会員出品、現代工芸会員賞（高島屋、日本橋、なんば）。

11 月 第 14 回日展「彩漆幻影」（漆二曲スクリーン）入選（東京都美術館）。

昭和 58 年（1983） 63 歳

4 月 第 22 回日本現代工芸美術展漆屏風「燐」（漆二

曲スクリーン）会員出品（高島屋、日本橋、なんば）。これを最後として 33 年間継続してきた公募展出品を辞め、出品活動の仲間との関係から身を引く。日展会友は終身で継続し、現代工芸美術家協会会員は退会する。井波美術協会と井波美術館同人は死去まで継続する。

昭和 61 年（1986） 66 歳

11 月 旧井波町芸術文化功労者表彰受章。

昭和 62 年（1987） 67 歳

11 月 富山県功労者（知事表彰）受章。

平成 元年（1989） 69 歳

4 月 黄綬褒章受章。

12 月 個展（筑波第一ホテル、筑波）。

平成 2 年（1990） 70 歳

5 月 個展（東京セントラル絵画館・銀座）。

10 月 個展（ギャラリー カッパ画廊・新宿、柏画廊とも）。

平成 9 年（1997） 77 歳

4 月 新世紀をひらく作家・うるしアート展「鶴と鯉」（衝立）出品（松村外次郎記念町立庄川美術館）。

平成 13 年（2001） 81 歳

7 月 膵臓癌のため旧井波公立総合病院（現在、南砺市民病院）で手術入院。

10 月 連盟結成 60 周年記念富山県工芸作家連盟展「朱の幻想」（昭和 56 年作）を出品（富山県民会館）。

平成 14 年（2002） 82 歳

2 月 27 日、同上病院で死去。本願寺井波西別院（山見）で葬儀が執り行なわれる。享年 82 歳。

井波大谷支院の墓地にある南部家代々の墓に眠る。

平成 15 年（2003）

2 月 富山県水墨美術館所蔵作品による工芸一美の美、富山県が生んだ人間国宝・重要無形文化財保持者らの作品展に「彩漆幻影」（漆二曲スクリーン）が出展された（富山県高岡文化ホール）。

平成 16 年（2004）

8 月 井波美術のあけぼの展—熱き時代のはじまりに「和室ラジオ棚」「漆二曲屏風—夕映え」が出展された（井波美術館）。

## 買い上げ作品

昭和 43 年（1968） 48 歳

「立山連峰」（漆パネル）富山市教育委員会。

昭和 48 年（1973） 53 歳

「立山連峰」（漆パネル）富山県教育委員会。

昭和 58 年（1983） 63 歳

「立山連峰」（漆パネル）井波町（竹下大蔵大臣に贈呈される）。

時期は不詳「蒼映」（漆二曲スクリーン）昭和 47 年第 4 回日展入選作、旧井波町役場町議控室（現在、南

砺市井波行政センター)。  
平成 14 年 (2001) 81 歳  
「飾棚」(彩漆飾棚) 昭和 50 年第 7 回日展入選作、富山県水墨美術館。

#### 寄贈作品

平成 13 年 (2000) 80 歳  
「ナイトスケープ III」(漆パネル) 昭和 54 年第 18 回日本現代工芸美術展入選作、井波公立総合病院 (現在、南砺市民病院)。  
平成 14 年 (2001) 81 歳  
「夜景」(漆二曲スクリーン) 昭和 48 年第 5 回日展入選作、富山県水墨美術館。  
同上「彩漆幻影」(漆二曲スクリーン)  
昭和 57 年第 14 回日展入選作、富山県水墨美術館。

#### 表彰

昭和 61 年 (1986) 65 歳 旧井波町芸術文化功労者表彰  
昭和 62 年 (1987) 66 歳 富山県功労者表彰 (知事表彰)  
平成 元年 (1989) 69 歳 黄綬褒賞受章

#### 役職

昭和 47 年 (1972) 1 月～昭和 53 年 (1978)  
1 月 井波漆工會會長  
昭和 52 年 (1977) 1 月～昭和 54 年 (1979)  
1 月 井波美術協會會長

※ 作品題名の「」内は作品写真(プロマイド)から転記し、「」の次の( ) は長谷川が付記。年譜作成は長谷川総一郎 2005. 2.21 加筆補正 2010.9.9

#### 注釈

- ※<sup>1</sup> 井波町史編纂委員会『井波町史 (上巻)』井波町、1970、p558
- ※<sup>2</sup> 松井建設は、天正 14 (1586) 年、初代角右衛門が加賀藩主前田利長公の命により越中守山城 (現在、高岡市) の普請工事に従事したのを創業としている。東証第 1 部 1745 社の内、最古会社。現在の会長は松井泰爾(角平 16 代目)。元南山見村今里、旧井波町西町、現在南砺市 (井波地域) 出身。江戸時代は加賀藩拝領地大工を努め、瑞泉寺など近郷近在の社寺を手がけた。明治期以降は全国をはじめインドや台湾にわたる社寺などを数多く建立し、現在は、社寺建築部門をもった総合建設業者である。
- ※<sup>3</sup> 「日本経済新聞」朝刊、2000 年企業一成長と持続の条件 19、5 月 14 日、2008
- ※<sup>4</sup> 前掲書『井波町史 (上巻)』p 559

- ※<sup>5</sup> 井波町史編纂委員会『井波町史 (下巻)』井波町、1970、p920
- ※<sup>6</sup> 富山県工業試験場『富山県漆工総覧』富山県漆器商工事業協同組合、1971、p79
- ※<sup>7</sup> フジミ書房『農商務省第 5 回図案及び応用作品展覧会図録 (復刻版)』フジミ書房、1998、p228
- ※<sup>8</sup> 前掲書、『井波町史 (下巻)』p903
- ※<sup>9</sup> 「北日本新聞」朝刊、ふるさと風土記 98 一井波 伝統の漆工芸、1.14.2000
- ※<sup>10</sup> 南部の先祖と年譜については、※<sup>1</sup> や※<sup>5</sup> の「井波町史」と南部の過去帳(写し)など文字資料を参照した。聞き取りは、病床にあった死去の 1 ヶ月前頃の南部から筆談をも含めて、妻・南部ふみからは主に戦後のことについて (南部の死後、10 数回)、南部の妹・山上芙美子 (86 歳) からは戦前のことについて (平成 22 年 [2010] 9 月 9 日)、横山清からは入門後のことについて (平成 22 年 [2010] 9 月 13 日) 取材した。  
吉英が 4 代目という捉え方は正しい。これは分家を初代とする日本の慣習に従っている。南部は死去の 8 ヶ月前の平成 13 年 (2001) 6 月 26 日、肝臓癌であることが分かったとき、これを記し、後世に残そうとした。  
しかし、血統の繋がる先祖の職人を包含するように辿ると、栄助 (栄輔初代) を 1 代目、栄輔 (2 代) を 2 代目、弥平を 3 代目、吉蔵 (初代) を 4 代目、吉蔵 (2 代) を 4 代目、吉英を 6 代目とする解釈も可能である。井波町史ではこの見方をする執筆者も居る。これは 1 つの見方として南部も肯定し、長年書き記してきた (長谷川久が家系図作成時、南部に取材、[昭和 60 年 [1985] 10.6])。先祖が瑞泉寺再建などに主導的立場をつとめ、白漆の治五右衛門とも深く関わってきたという有能な職人系列の家柄としての、これも後世に伝えたい南部の誇りだったのであろう。
- ※<sup>11</sup> 本田顕彰『歎異抄入門』光文社、1968、p98
- ※<sup>12</sup> KODA ゆずり葉通信  
[www.rakuraku-soft.com/koda/index.php?id=392](http://www.rakuraku-soft.com/koda/index.php?id=392)
- ※<sup>13</sup> 掲載紙は昭和 37 年 (1962) 2 月 4~5 日の間に、北陸中日、富山新聞、読売新聞、中日新聞、北日本新聞。特別にコラムでも掲載され、これ以降マスコミから発表作品を期待されるようになった。
- ※<sup>14</sup> 「毎日新聞」朝刊、11 月 21 日、1975
- ※<sup>15</sup> 「南部吉英略歴」(本人執筆)、1967
- ※<sup>16</sup> 「北日本新聞」朝刊、10 月 29 日、1984
- ※<sup>17</sup> 「朝日新聞」朝刊、4 月、1989
- ※<sup>18</sup> 京漆器平尾傳右衛門に入門したことは南部本人が記



した経歴類にはほとんど記載が無い。年季奉公の途中で陸軍工学校に進学したので公表を嫌ったのか。南部らしい潔癖さなのか。でも新聞記者には語っている(2000.1.14 北日本新聞、朝刊)。漆芸界ブランドの京都に学んだというだけでも経歴記載の価値ありと筆者は判断して、南部の死後であったので、平成16年(2004)の「あけぼの展」と平成20年(2008)発行の「井波美術協会総史」にその事実を記載した。南部の経歴としては初めての公式記載であったと思う。

昭和5年頃、井波八幡宮の神輿修理に平尾の弟子が招かれ、井波漆工組合員が手伝ったという。その時、小学校4年生頃の南部も参加。それを縁に父・吉蔵が綿貫榮を介して平尾を南部の入門先として選んだようだ。平尾家は江戸中期から続く塗師平尾七郎右衛門11代の分家筋。南部は3代平尾傳右衛門伝三に入門。両平尾家とも代々、社寺の塗装を手がけ、螺鈿・青貝を得意としていた。

平成9年(1997)南部は平尾家を60年振りに訪ねている。共著者・長谷川は、4代目傳右衛門伝治の妻(3代目の子)に電話で確認した。伝三は昭和52年(1977)既に死去。この南部の平尾家訪問は家族には伝えずに死去していった。

※19 陸軍士官学校への当時の進学は、旧制中学校や陸軍幼年学校経由がルーティンコースであった。しかし、人材確保のため陸軍工学校からの進学にも道を開いていたが、80~100倍の難関であったという。難関の同校入学や成績優秀での卒業は地元の新聞に掲載され、父吉蔵(義一郎)は喜んでいたという(山上談)※10。

## 参考文献

1. 井波彫刻資料保存委員会『井波彫刻師系譜—組合創立80周年記念』井波彫刻協同組合、2001
2. 大西紀夫ら『真宗大谷派井波別院瑞泉寺誌』真宗大谷派井波別院瑞泉寺
3. 京都造形芸術大学ら監修『京都職人一匠の手のひら』水曜社、2007
4. 京都漆器工芸協同組合『京漆器—近代の美と伝統(資料編)』光琳社出版株式会社、1983
5. 島田崇志『写真で見る祇園祭のすべて』光村推古書院KK、2006
6. 城端町史編纂委員会『城端町史』城端町、1960
7. 真宗大谷派宗務所出版部『両堂再建』真宗大谷派宗務所出版部、1997
8. 真宗大谷派宗務所出版部『真宗本廟東本願寺』真宗大谷派宗務所出版部、2006

9. 千秋謙治『井波—歴史のうねり六百〇〇年』井波町、1990
10. 千秋謙治『瑞泉寺と門前町井波』桂書房、2005
11. 富山県『郷土に輝く人々』富山県、1972
12. 偕行社『同期生名簿昭和50年版』(陸軍士官学校第60期生など)偕行社、1975
13. 日向進『越中井波の彫物大工番匠屋—その系譜と活動の実態』(日本建築学会計画系論文報告集第417号所収)、日本建築学、1990
14. 松井建設『松井建設四百年のあゆみ風雪の社寺建築史』松井建設株式会社、1989

## 聞き取り、資料提供協力

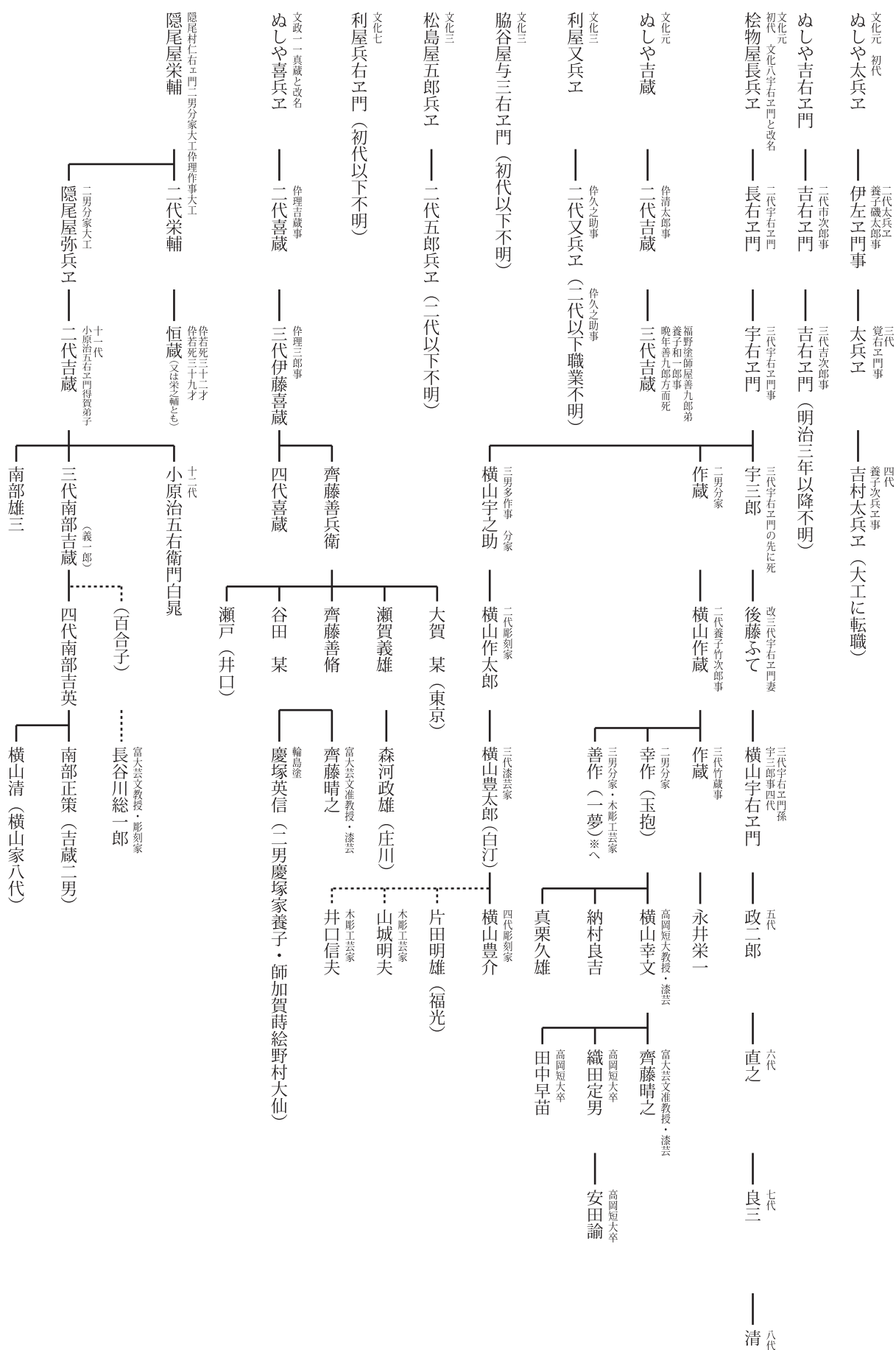
(平成13年〔2001〕頃から平成22年〔2010〕まで、系譜調査も含む)

新敷孝弘(故人)、織田定男、川原和夫、久保浩一・美智子、志観寺従範、清水捨造、14代小原治五右衛門白照(小原好博)、庄川美術館、瀬賀尚義、太島明雄、田村實、土田貞子、名取川雅司、塗師岡政秀、南部吉英(故人)、南部ふみ、西田一成、久田鉄也、山上芙美子、横山清、横山善一、横山幸文(故人)

## 追記

平成22年(2010)年9月に南砺市井波地区で開催された「寺のまちアート in いなみ 2010」天神様展(第1回の南砺里山博2010)で、久保浩一宅に田村与八郎彫刻・南部雄三彩色(檜製極彩色、昭和7年)の天神様が展示され、箱書きに南部雄三の銘が入った同氏最初の作品が確認された。南部雄三は南部吉英の叔父、吉蔵2代の弟。漆塗師を生業とし、絵が得意であったと伝えられるが詳細は不明。

## 井波漆と関係者系譜(1)



## 井波漆と関係者系譜（２）

